

積み木研究における展望と課題

教職開発コース 宮田 まり子

Review of Research on the Building Blocks

Mariko MIYATA

This paper reviews the studies on building blocks in ECEC (Early Childhood Education and Care) and the documents of ECEC practice to clarify the importance of building blocks in ECEC settings. Building blocks are one of the Froebel gifts, and the educational intention encouraged early childhood education. Findings from the studies illustrate that the blocks with simple shapes draw various actions and ideas from children. It also helps children interact with one another. However, there are few studies focusing on the effect of building blocks on children in practical situations, and further researches are needed.

目次

- 1 問題と目的
- 2 保育実践に見る積み木の教育的意義
 - 2-1 積み木の誕生
 - 2-2 日本における保育への導入期
 - 2-3 積み木使用を巡る転換期
 - 2-4 戦後教育の刷新を越えて設置された積み木
- 3 近年における積み木研究と積み木制作
 - 3-1 素材としての積み木に関する研究
 - 3-2 積み木を媒介とする相互作用に関する研究
- 4 考察

1 問題と目的

幼稚園において一般的に見られる物的環境には、屋外では砂場やブランコ、ジャングルジム、鉄棒、滑り台があり、屋内では一般家庭で大人が使用する料理道具や食卓のセット等のままごとコーナーや絵本、積み木がある。中でも積み木は1840年に世界で最初に幼稚園が開設された頃より存在し、以来世界中の多くの子どもが積み木での遊びを体験している。

積み木の設置に関しては、設置基準において義務化はされていないものの、幼稚園教育要領解説において積み木に関する記述がみられる。それは幼稚園教育要領の中に書かれた「(2)いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。」「(8)日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。」「(2)幼児の活動に沿って環境を構成する」「3 体験の多様性と関連性」の解説部分に例として挙げられている。この解説から、今日の幼稚園では積み木は、

身体的な発達や数学的な基礎力の育成、環境の再構成と様々な物との関連性が生じ得る遊具としての期待が寄せられていることがわかる。そこで本研究では、現在多くの幼児教育施設が保持する積み木の価値と幼児教育施設における教育的意義を、積み木を用いた保育実践の記録や積み木研究を概観し、保育教材研究としての積み木研究の今後の課題を検討することを目的とする。

日本の幼児教育分野における教材研究は未だ少ない。さらに、特に積み木は幼稚園設立より乳幼児期の育成に必要なものとして設置されてきたにも関わらず、積み木固有の乳幼児の育ちへの影響について学術論文として出されたものは少ない。そこで本研究では、乳幼児保育における積み木を対象にされた研究に、保育方法として積み木が用いられた実践記録を加えた上で概観する。なお、積み木は、教育玩具の歴史を究明した是澤博昭によって「明治期に幼稚園の『恩物』として日本に紹介された、外来の玩具」¹⁾であることが示されている。本研究においても積み木は恩物の流れで発生したものとして捉え、検討を行なう。文献は、世界で初めて幼稚園を設立し、日本の幼児教育の創設にも影響があったFriedrich Fröbelが著した物から2013年までにおいて国内で発表されている論文であり、乳幼児を対象とした論文とする。また、積み木の設定の仕方と、積み木を巡って保育内容に変化が見られた時点で時代を区分して整理し、検討を行なう。

2 保育実践に見る積み木の教育的意義

2-1 積み木の誕生

今日日本の幼児教育施設に設置されている多くの積み木は、Fröbelが制作したGabe（恩物）にその起源を見ることができる。Fröbelは、1782年にドイツチューリンゲンに生まれ、1840年に世界で最初の幼児教育施設Kindergartenを設立した人物である。そのFröbelが世界で初めての施設の設立にあたり、必要として制作したものがGabeであった。Fröbelの教育学は、Fröbelが経験し学んだ様々な学問的背景によって生み出されたものであるが、このGabeの制作には、Fröbelが慕ったPestalozziの影響があるものと思われる。FröbelはPestalozziのもとで、人間に影響を与える対象物に関心を持ったとの報告¹が残っている。Fröbelにとって、施設開設にあたり、そこでの保育を支える教材の制作は必要不可欠なものであった。Fröbelは、遊びを『『外的世界への鍵』であり、同時に、『内的世界の覚醒に最も適した手段』³⁾であるとし、保育内容として子どもの遊ぶ行為を尊重したが、そうした外的世界に向かう過程、内的世界の覚醒へのきっかけとして、媒介物が必要であると述べた。つまり、媒介物によってこそ、子どもの内なる神性の現れである自己活動性、活動衝動は正しく導かれるというのである。幼児教育施設に設置された今日の積み木の起源であるGabeにはそのような教育的意図が込められたのであった。

2-2 日本における保育への導入期

日本の幼稚園教育は明治9年開設の東京女子師範学校附属幼稚園から始まった。幼稚園教育百年史によれば、幼稚園という幼児を対象とする学校はそれまでの日本に存在せず、既に設立され実践が行なわれていた欧米の幼稚園に倣う形で誕生し、展開したとされている。ドイツでFröbel主義の幼児教育に基づく保育者としての養成教育を受けた松野クララが初代の主任保母を勤めた東京女子師範学校附属幼稚園では、Fröbelの恩物を操作することを主たる活動とした保育実践が行

なわれている。²ただ、この恩物に関しては、この松野クララなどの日々の保育実践によって初めて日本に伝えられたというのではなく、開設以前から紹介されていたことが明らかになっている³。「幼稚園」という学校を、国民に理解してもらうための手段として、恩物が紹介されたことがうかがえる。幼稚園普及のための手段とされたのではないかとの解釈は、国吉栄が幼稚園の開設に尽力した関信三を取り上げた「幼稚園誕生の時代—関信三の葛藤—」でも見られる。国吉はその著書「(十一)『幼稚園法二十遊嬉』—幼稚園の普及を願って」において、明治12年3月に出版されている『幼稚園法二十遊嬉』は、保育における恩物の普及を意図して書かれたというだけでなく、むしろ当時幼稚園普及のために急務とされた保育者の育成に寄与することを意図して書かれたのではないかと述べている。

恩物は、まさに「人間の教育」を意図して制作されたものであり、日本においても当然ながらその意図によって着目されたとは思われるものの、結果的には、近代化を目指す歴史的潮流によって幼稚園教育の普及を目指すために提示のしやすい道具として用いられたとも取れない状況になってしまったのであろう。当時の実践において、恩物の教育的意図への追及はどれほど行なわれたのだろうか。筆者が手にした記録から、あまり期待は出来なかった。

2-3 積み木使用を巡る転換期

明治32年に、国として初めての基準となる「幼稚園保育及設備規程」が出された。これにおいて保育内容は「遊嬉、唱歌、談話、手技」とされた。恩物は「手技」に含まれた。幼稚園教育百年史では、この規定を「明治前期の恩物主義から脱皮したもの」と捉え述べている。アメリカでは、恩物の使用により児童の主体性よりも保育者の意図が中心になってしまう恐れがあるのではという、いわゆるFröbel主義の保育に対する批判が起こる。HillとPrattの積み木は、Fröbel主義保守派

1 Fröbelの書簡の中に「人間は対象物の世界に住んでいるが、その対象物は人間に影響を与え、人間また対象物に影響を与えようとしている。それ故に、人間は対象物をその本性や本質に従って、対象物相互の関係やその人間に対する関係に従って認識しなければならない。対象物は形(形の学習)と量(量の学習)とを有し、多様(数の学習)である」²⁾とある。

2 東京女子師範学校附属幼稚園で最初の保母であった豊田英雄子はその手記「保育の栞」の中で、「二十恩物の第一より第六号までは専ら物體を指示するものなり。第七の板並べは小兒既に物體を熟知したる其一面片を以て所謂想像力を養ふの方法なりとす。」⁴⁾と述べて、保育中での恩物の用い方を伝えているが、順序と方法に法則があることがわかる。

3 幼稚園教育百年史には、「既に明治八年、近藤真琴が『子育ての巻』のなかで、明治五年ウィーンで開かれた万国博覧会で紹介されたFröbelの童子園(幼稚園)のことを詳しく記述している。明治九年一月には、桑田親五訳『幼稚園』(イギリス人ロンジ夫妻共著)が出版され、その中で恩物が紹介されている」⁵⁾とある。

の保育者主導による一斉保育の改革を目指し開発されている。橋川(2006)によれば、Prattは「こうした積み木や玩具が子どもたちの思考を促す前提は、子ども自身が頼るべき関連知識を持ち合わせていることである。」⁶⁾として、積み木を教師の指示において用いるのではなく、子どもの生活経験に基づく自由遊びの中に位置付けたという。

明治後期から大正にかけて出された中村五六・和田実共著『幼児教育法』や、倉橋惣三著『幼児教育』においても、恩物中心の保育内容については批判されている。倉橋惣三は、「その構成原理は、大人としては論理的興味を満足させられるものであっても、幼児に要求せらるべきものではない。」⁷⁾と述べ、恩物の使用に順番を付けて規則的に扱う方法から、全ての恩物の使用方法を子どもたちに委ねる方法へと転換することを「解放」として述べてその必要性を説いた。とはいえ、倉橋は決してFröbelの教育そのものを否定したのではない。倉橋は、「フレーベルが幼児の遊びにおける表現と創作との教育指導のために、物的材料の必要をはやく着眼して、その積極的提供に苦心したところに尊重を払うべき」⁸⁾と述べる。Fröbelが考案した具体物を使用することがその教育の達成なのではなく、子どもの表現と創作を教育するために必要な材料とは何かを検討していく保育者としての姿勢こそ教わらなければならないとした。

1927年の堀七蔵によるアメリカの幼稚園教育に関する報告書には、「三歳・四歳・五歳六歳等の普通教室では凡て幼児は煉瓦大の積み木で床上にすわつて一生懸命にいろいろのものを表現してゐます。—中略—幼児の自由表現であつて保姆は熱心に幼児の表現を観察してゐます。一切幼児のなすが儘で教師は全く干渉しないといふ有様であります。—中略—教室といつても別に腰掛もなく卓子もなく、床上に大小の積み木があるだけであります。」⁹⁾とある。その他、堀は、幼児が積み上げた家の形の積み木などは一か月も二か月もその場に保存されることがあるということ、積み木を入れる運び車が幼児が行う積み木の片付けの促進に効果的であることに加え、保姆養成コースのある学校には「積み木室」があり、幼児が積み木で遊ぶ際の適当な指導について研究することは必要であると提言している。堀が報告書として綴った欧米の教育施設に対する数々の感動は同時に、当時の日本がそれとは異なる保育を展開していたことを表わすものである。

「恩物からの脱却」が、上記のようなアメリカを含む運動や思想的背景と、幼稚園の普及が進んだこと

による変化であるのかは言及できないが、実際は、明治後期から大正期の幼稚園では、恩物の一部として見られていた「積み木」がそれ単体で遊具として扱われ、そして次第に大型になっていったようである。事実、1909年に雑誌「婦人と子ども」の中に、「玩具研究部賛助員への配布玩具説明」という記事が掲載されており、対象を「自二年至三年男女児」として「大積み木」が紹介されている。記事には「大積み木」が、中村五六が「Fröbel氏の積み木には各段階の間に連絡がない」¹⁰⁾との理由から制作を考案した第一積み木を大きくしたものであり、「ある幼稚園では一尺立方の積み木を造り遊技場に於て共同に用ひさせておる處もある」¹¹⁾と事例を紹介し、「児童は高い處大なるものを好む」ゆえに「向上心を助長する」¹²⁾ものであると伝えている。また、1932年の雑誌「幼児の教育」には、榊原キクによって川の組5月の一週間の記録が掲載されている。榊原による5月23日の記録には「室隅には一昨日土曜日にレールや鉄橋に用いた床上積み木があるけれどもこれを取出して汽車のレール建設に当らうとする着は居ない。」¹³⁾とある。その頃の東京女子師範学校付属幼稚園の保育室では、幼児が積み木を自由に遊びに取り入れられるように設置されていたことがわかる。また、幼稚園教育百年史によれば、各幼稚園において、「床上積み木」「ヒル氏の積み木」「接続積み木」「小型の卓上積み木」「箱型の大型積み木」「中空箱型の大型積み木」、「大恩物積み木」等、色々な積み木が制作される等して、様々な積み木の使用が見られたようである。そして、積み木の使用は幼稚園だけではなく、勤労家庭の幼児を保育した託児所においても用いられることがあったようである。1933年の雑誌「幼児の教育」において、当時東京府社会課に属していた浅原梅一は、託児所にHillの積み木を作って与えた際の幼児の遊ぶ姿を観察し、「幼児に遊び道具を与えて置けば種々な遊びに之を進展させて、平面から立体に、静から動にご活用して行くものだ」¹⁴⁾と報告している。

導入期における恩物や積み木に対する政策的意図から、実践を基にした教育的意図へと探求が及んだことにより、恩物や積み木の教材としての在り方が大きく変化している。また逆に言えば、それらの物が目的ではなく手段として用いられたことにより、保育目標が保育者主導のものから幼児の主体的活動を伸長するものへと変化する兆しが見られる。

2-4 戦後教育の刷新を越えて設置された積み木

戦後の日本は、米国総司令部の日本教育指導による

指導のもと、制度や内容を再建していく。1947年に出された「幼児の教育」に、その総司令部日本教育指導に参加していたヘレン・ヘファーナン女史が玉成高等保育学校研究会において行なった講演の手稿が掲載されている。それによれば、「幼児たちには力いつばいあそぶための玩具が必要」¹⁵⁾であるとして積み木は最も良い用具であると挙げられている。また、実社会にある物を積み木で見立てて再現して遊ぶことは「自分の周囲の生活を取り入れ、こうして自分と社会とを結びつける。—中略—やがて入るべきおとなの世界の生活を理解するようになる」¹⁶⁾と伝えている。そして「自由遊び」と題した遊びの必要備品設備として、大積み木を挙げ、自由遊びでは「指導と見まもりとは必要であるが、おとなの指摘は極く少しだけにする。」¹⁷⁾と述べている。

ヘレン・ヘファーナン女史の保育観は、戦前の特に大正期に展開された保育観と共通する部分を多くみることができる。このような人々の捉え方によって、積み木はその意図を大きく変えることなく、再び幼児教育施設に設置されることになる。

1948年に出された「保育要領」は、戦後の教育政策の中でいかに幼稚園教育を実施していくかが具体的に書かれたものであり、園で揃える遊具については「じょうぶなもの」¹⁸⁾「幼児はくふうでき、想像して遊ぶおもちゃをよろこぶ。既製品はすぐ飽きる。簡単で未完成で、遊び方が種々あるものがよい。」¹⁹⁾などと言及している。また、積み木に関しては「小積み木、ヒルの積み木—そろい、及び其の他の小積み木もできるだけたくさん」²⁰⁾とあり、「大積み木(箱積み木)」については「40個」という具体的な個数への言及に加え、「80cm×40cm×10cm…5」といったように、大きさと個数の内訳までもが明記されている。

とはいえ、「保育要領」から変更が行われた今日の「幼稚園設置基準」や「幼稚園教育要領」には、積み木について具体的に述べる記述はない。しかし、今日多くの幼児教育施設において積み木は見ることができる。1976年に東京都の第5次幼児教育問題調査委員会が行なった調査では、東京都では大型箱積み木=80%、中型=70%、小型=40%、床上積み木=80%の幼稚園に設置されており、箱積み木が一切ないという園もなければ小型しか設置していないという園はなかったとの報告がなされている。積み木の設置は義務付けられてはいないものの、設置する物であることが定着している様子がうかがえる。報告書には、積み木は①友達と囲まれることで安定できる教材・教具②友

達と固まれる場や物を提供して、かかわりを期待する教材・教具③友達とのつながりの深まりを可能にする教材・教具④友達と一緒に活動に取り組むために必要な教材・教具⑤友達とチームで競い合う活動に必要な教材・教具⑥解放感を伴う活動に必要な教材・教具⑦目的に応じて、幼児が自由に働きかけられる教材・教具⑧目的に応じて、多面的な扱い方や見方が可能な教材・教具⑨物の形の特徴に気付いたり、形に対する感覚を養ったりする経験に対応する教材・教具⑩前後、左右、遠近などの位置関係について、興味や関心を持たせる経験に対応する教材・教具として述べられている。

積み木は、保育者の日々の実践において、長きに渡ってその教育的効果が認められた教材の一つであるといえる。清水(1959)は、積み木遊びを行なう子どもたちの様子を振り返り、「遊べない子が体全体を動かして遊び(身体的)・劣等感があり何もできない子が考えて目的を持って作るようになり(知的)・感情を表わさなかった子がすなおに自分をみせてくれ、合わせて感情の処理(情緒的)もできるようになります」²¹⁾と述べた。そして清水はその経験から、「積み木遊びのふれ合いでおたがいの得手・不得手を知り、合理的にパートを分け合って遊べるようになりました。」²²⁾と述べている。また清水(1960)では、積み木遊びにおいて破壊的行為がみられる幼児について、積み木遊び場面における破壊行為時の仲間関係に注目し、研究を行なっている。清水と同様に、日々の保育を振り返り、事例として切り取られた物の中に、積み木場面が取り上げられているのを見る(村田1967、中島1998、阿部2002、矢野2005等)。これらのレポートには観察記録に基づく分析はないものの、そこでの考察から、日々保育に関わる者にとって積み木が効果的な教材の一つとして受け入れられているのかがわかる。

この様に積み木は、幼児教育施設の内容を紹介するための道具ではなく、また、必ずしも保育者主導による教示のための教材としてだけではなく、子どもの健やかな育ちを願う日々の保育の営みによって創造された幼児教育施設における文化が、積み木を必須な教材として存在させている。

では、実際に積み木という教材が持つ教育効果には何があるのだろうか。積み木の教育的意義とは何であるのか。以下では、積み木との関係について検討された研究を概観し、その知見から教材としての積み木の意義を検討する。

3 近年における積み木研究と積み木制作

戦後に出された積み木に関する研究は、①積み木という素材のもつ特徴について検討された研究と、②積み木という素材が持つ何らかの刺激を基に幼児間・大人間の相互作用について検討された研究がある。

3-1 素材としての積み木に関する研究

積み木という素材が乳幼児の発達にどのように影響するかについて述べられた研究がある。人と物の二項の関心に焦点を向けた研究になる。そしてその研究は、積み木の形状について論じた研究と、積み木という物体への操作に着目し、その発達の過程を明らかにすることを試みる研究とに分けることができる。

積み木の形状について論じた研究には、黒江・鈴木(1961)や石賀(2009)がある。

黒江・鈴木(1961)の研究では、L字型積み木と棒積み木の二つの形状の積み木を用いた実験から、積み木の形状により幼児が得られる体験に違いが見られたとの結果が示された。そして石賀(2009)は、2施設での積み木遊びの観察から、シンプルな形状の積み木では、「巻き込み度数」⁴が高くなり、穴あきの積み木でその穴に円柱の積み木が通せる形状のものは巻き込み度が低くなり、積み木そのものと関わる集中力が増したとの結果を示した。石賀(2009)の結果からは、積む等の行為を生む積み木そのものが相互作用を促進させるだけではなく、積み木固有の形状も相互作用の促進に影響していることが示された。

積み木という物体への操作に着目し、その発達の過程を明らかにすることを試みる研究としては、伊藤・高橋(2011)がある。伊藤・高橋(2011)は、対象児の1歳6か月から2歳までの期間における家庭での積み木遊びの様子を記録し、分析を行なっているが、「間隔の概念は、密着から拡散へと広がる」「積み木の重心を揃えると高く積むことができることを体験から学んでいる」「平面から立体へ概念が形成される」との知見を得ている。また鎌野(1998)は、幼児に積み木を与えることの教育的・造形的意義について、積み木を積むことによってできる空間がイメージを誘発するのではないかとし、「空間構築がなされてから想像すること、想像するから空間構築できることを繰

り返しながら螺旋のように展開されていくのが積み木の世界の魅力の一つであると考える」²³⁾と述べる。岩田(2004)は、積み木で遊ぶ幼児の観察結果から、クラス年齢による操作の仕方の違いを明らかにし、その操作に関する発達の変化は、「空間の認識、空間における自己身体の認識、行為の計画や時系列的な遂行能力、さらにはことばを時系列的に紡いでいく行為の発達と密接につながったものであることがうかがえる」²⁴⁾と述べている。宮川・加藤(1997)は、1～3歳児までの子どもたちの小型木製立方体での遊びの様子から、子どもは積み木を頭の中で構成し関係づけながら積んでいると述べる。積み木を高く積むためには①物理的知識②空間的推理③分類④系列化の4つの要素を必要とするが、子どもたちはそれを試しながら構成し積み上げていると言う。その結果から、積み木の利点を、①子どもの働きかけたことへのフィードバックの反応の速さ②繰り返しにおける結果の規則性にあると言及し、故に積み木遊びでは、行為と結果の因果を発見しやすいと述べている。

その他、積み上げや崩しの行為への着目だけでなく、オークヴィレッジ社の「寄せ木の積み木」やネフ社の積み木、セレクトタ社の木製玩具、WAKU-BLOCKなど、素材に対してねらいを持った積み木や、基尺と呼ばれる積み木の寸法に意図を反映させた積み木が制作され(奥村2008)、積み木の使用法を伝えるワークショップが開催されたりもしている。今後は、積み木の素材が出す音や積み木を使用する空間との影響にも研究が展開されていくことも予想される。

3-2 積み木を媒介とする相互作用に関する研究

上記の知見は、素材としての積み木が及ぼす乳幼児個人への影響を明らかにしたものである。以下の研究では、そうした何らかの特徴を持つ積み木が教材となった時、どのような相互作用が期待されるのか、人と物と人の三項関係に焦点を当てた研究になる。

村松(1999)では、「葛藤をへて分かち合う」というコミュニケーション能力についての検討を行なっているが、そこでの考察に用いられた事例は積み木場面であり、浅川(2007)においても、積み木場面における三歳児の協働について、観察を基に分析を行なっているが、積み木が壊れた時、壊された時の状況を考察している。これらは「崩し」という積み木の構造物固有の変化を利用した研究である。こうした研究は、積み木の固有性を交えた分析はなされていないものの、積み木が相互作用を生むきっかけとして適している可

4 「巻き込み度数」は、石賀の造語であり「素材が遊び手との往還の中で周りと関わっていきながら周りのものや状況を巻き込んでいく量そのものを数値化していくもの」を表わすと定義されている。

能性を示唆するものである。

積み木という物のやり取りに着目をした研究では山本 (1987) がある。山本 (1987) は、乳児の物の受け渡し時における対人理解の発達について研究しているが、その際の実験で使用された物は積み木であった。牛山ら (1974) は、遊具の種類と相互作用の関係を明らかにする実験結果から、積み木は「幼児がそれぞれの能力に応じたやり方で自分の力を発揮でき、一方の積み木遊びが他方のそれを誘発して共通の場を作ることが確認された」²⁵⁾ とし、積み木の相互作用成立への有効性を示唆した。藤崎・無藤 (1985) は、観察室にて教示を与えたペアに対する分析で、積み木遊びにおける幼児の共同遊びの構造を明らかにした。増田・中尾 (1986) は、「大型積み木は、社会的参加が比較的なされやすい遊具」²⁶⁾ であるとして、幼児の社会的相互作用の観察に大型積み木を用いている。ただし、増田・中尾 (1986) の積み木を用いた研究実験では、結果として積み木を介した相互作用が発生しているとの確認はなされているが、それが積み木によるものであるかどうかについては分析されていない。

積み木が数量で捉えられるという積み木固有の特性を基に、2 者間による相互交渉を明らかにした研究には山本 (2011) がある。山本 (2011) では、結果、積み木の数を限定した場合、4 歳半頃までは一人遊びの状態であったが、4 歳半頃から共同のあそびへと発展したこと、多数の積み木が用意された場合でも、2 歳児群と 4 歳児群でそれぞれに相互作用 (衝突) は確認されたとの結果が示された。積み木の数が多数であったにも関わらず衝突が生じたのは、山本 (2011) が示す事例から、子どもは積み木を一様に等しく見ているのではなく、遊びの過程で 2 歳児であれば何らかの出来事 (床に落ちる等) により意味付けされた積み木が生まれることによって、4 歳児であれば必要な特定の形の積み木が生まれることによって、特別視された積み木が生まれたことによると思われる。この結果は、数の限定が相互作用の促進に有効に働くことと、遊びの進行によって、積み木の一つ一つに遊び手にしか見えない価値が生じてそれが積み木を巡る行為に影響を与えていくことを示唆している。

4 考察

今日の幼児教育施設に設置されている物的環境は、フレーベルの教育観に基づき作られた教材に起源がある。つまり、保育における教材とは、児童には善く育

つ力がありそれを引き出すことが意図されたものであり、こちらの意図を教示するためだけの物ではないのである。物的環境は、運動により必ず変化する。そしてその運動のほとんどは可視化される。運動による効果は素早く現れる。その見た目のわかりやすさが提示のしやすさを生むが、それ故に形式的なことのみが伝達される危険を持つ。日本のように急速に組織化された教育制度においては、幾らかその危険を受ける形で、形式的な部分のみが広まってしまった時代があったことは否めない。

一方で、恩物などの教材によって、幼児の教育が象徴的にも可視化されたことから迅速に普及したその功績は大きい。特に、可視化されることによりそれぞれの保育が問われ、問われる中で保育の質に対する議論が起きている。それぞれの保育者が設定する物的環境を、他の保育者がモニターとなって語り合うことで、また、子どもがその環境に応じた軌跡を残すことで、保育者主導のものから乳幼児の主体性を重視する保育への変革は起きたのであった。

先行研究から積み木は、「並べる」「積む」「崩す」などの多様な行為を行なうことができ、その行為と目的や課題に対して、必要となる能力を変化させる物であることがわかった。また形状に応じて行為と経験は異なり、構造に変化が生まれやすいシンプルな形状の物の方が相互作用場面を増加させることが示唆された。

今後も、その様な積み木の固有性からの行為への影響について、素材や基尺等の因子を含め、より多くの知見を究明していく必要がある。そこでの知見を基に、保育教材としての積み木の在り方が検討されなければならない。

そして、先行研究の多くが、実験室での実験結果に基づくものであったり、家庭における観察であったりと、実験室における幼児の数と月齢差の幅の狭さ、開始 (遊び出し) と方法が教示された中での出来事であること等の因子が、実際の保育室での子どもの積み木場面との異なりを生んでいることは否めない。実際の幼稚園には、保育室の多様な要素 (複数の児童や保育者などの人的環境、場の広さなどの空間、時間等) がある。幼児教育施設においては「教材・教具といっても、それが本来持っている意味だけで使われるのではなく、幼児の側で意味付けをして使われることが多い」²⁷⁾ との報告もある。そのような多様で大量の情報の中で、また日々の生活の流れの中で、子どもたちは積み木を通してどのような経験をしているのだろうか

か。その時々保育者はどのような意義を見出して、保育に関わる事ができるのだろうか。そのような多角的な要因の中での積み木の価値を究明していくことは今後の課題である。

注

- ・第5次幼児教育問題調査委員会(1977)東京都における幼児教育の在り方について(第5次報告)ー幼稚園・保育所における望ましい施設、設備、園具及び教材・教具の在り方ー
- ・増田公男・中尾忍(1986)大型積木遊び事態に於ける幼児の社会的相互作用行動の分析Ⅰ、金城学院大学論集人間科学編11、91-100
- ・増田公男(1991)大型積木遊び事態における幼児の社会的相互作用の分析Ⅱー3歳児での事前の関係の効果ー、金城学院大学論集人間科学編16、107-126
- ・山本政人(1987)物の受け渡し課題で見る幼児の対人的理解の発達、教育心理学研究第35巻第1号、74-78
- ・浅川陽子(2007)三歳児の協働、幼児の教育、16-23
- ・村松賢一(1999)コミュニケーション能力を考える(1):葛藤をへて分かち合う心、幼児の教育、36-43
- ・板倉哉子・諸戸千代・早川きみ子・多田和子・神沢良輔(1961)幼児のあそびにおける科学的認識について(第一報告):積み木あそびにおける重心の認識を中心として、日本保育学会研究発表特集、幼児の教育、38-40
- ・高橋光子・鈴木淳子・奥村喜美子(1967)幼児の遊び、幼児の教育、65-70
- ・岩田純一(2004)子どもと出会う(7):子どもの積木、幼児の教育、15-25
- ・黒江静子・鈴木隆子(1961)積木の構造に規定される構成活動の一考察、日本保育学研究発表特集、36-38
- ・ヘフアーナン、ヘレン(1947)現代幼稚園教育の発達、幼児の教育、5-8
- ・堀七蔵(1929)私の視たる米国の幼稚園教育:ボストン、幼児の教育、8-15
- ・堀七蔵(1929)私が視察したる米国の幼稚園教育(承前)、幼児の教育、7-16
- ・堀七蔵(1928)私の視たる米国の幼稚園教育(四)、幼児の教育、2-17
- ・榊原キク(1932)川の組(五月の一週間:東京女子高等師範学校附属幼稚園に於ける保育の実際)、幼児の教育、28-33
- ・朝原梅一(1933)勤労家庭の幼児の保育、幼児の教育、2-6
- ・文部省(1979)幼稚園教育百年史、ひかりのくに
- ・伊藤智里・高橋敏之(2011)一幼児の積み木遊びに見られる多様な発達の特徴、美術教育美術学会誌32、41-53
- ・宮田まり子(2003)フレーベルにおける「遊び」の原理的考察、人間の福祉、立正大学社会福祉学部紀要、13、49-69
- ・橋川喜美代(2006)アメリカ進歩主義幼稚園の改革運動と(砂場)ー砂場と大型積み木開発からの示唆を中心の一鳴門門教育大学研究紀要、21
- ・鎌野智里(1998)保育遊具としての積み木の教育的意義、美術教

育 日本美術教育学会277

- ・宮川洋子・加藤泰彦(1997)「積み木遊び」の発達の研究ー3歳未満児の保育を見直すー、エデュケア21、3(2)、74-78
- ・清水エミ子(1959)積み木遊びにおける幼児集団の研究から、幼児の教育、(58)10、27-31
- ・牛山聡子・清水知子・高橋道子(1974)教育心理学研究22、(3)
- ・石賀直之(2009)積み木遊びにみる幼児と素材との相互作用の構造に関する研究、鶴見大学紀要、46、(3)、41-47
- ・山本弥栄子(2011)共同あそびにおける幼児間のイメージ共有と保育の課題ー限定数と多数の積み木あそびとの比較検討ー、創発大阪健康福祉短期大学紀要、10、65-76
- ・藤崎春代・無藤隆(1985)幼児の共同遊びの構造:積み木遊びの場合、教育心理学研究、33(1)、33-42
- ・豊田美雄子(1929)保育の栞 幼児の教育 2-10
- ・奥村和則(2008)木製玩具と制作に関する一考察 岐阜市立女子短期大学研究紀要第57輯 93-98
- ・村田修子(1967)たのしかった日日(幼稚園におけるのぞましい活動) 幼児の教育 9-14
- ・中島寿子(1998)子どもにとっての仲間の意味について考える 幼児の教育 23-31
- ・阿部康子(2002)遊びを通して子どもの育ちを考える(3):二期始発の急ぎすぎた保育者 幼児の教育 46-53
- ・阿部康子(2002)遊びを通して子どもの育ちを考える(1):「飛行機を飛ばそう」から怪獣との戦いが始まった 幼児の教育 34-42
- ・矢野智司(2005)幼児教育の独自性はどこにあるのか(1):遊ぶ子どもの力 幼児の教育 8-13
- ・記者(1909)玩具研究部賛助員への配布玩具説明、婦人と子ども、pp29-30

引用文献

- 1) 是澤博昭(2009)『教育玩具の近大ー教育対象としての子どもの誕生ー』、世織書房、p113
- 2) 小原國芳・荘司雅子監修(1977)『フレーベル全集 第一巻・教育の弁明』玉川大学出版部、p148
- 3) 宮田まり子(2003)「フレーベルにおける『遊び』の原理的考察」、人間の福祉、立正大学社会福祉学部紀要、13、p49
- 4) 豊田美雄子(1929)「保育の栞」、幼児の教育、p9
- 5) 文部省(1979)『幼稚園教育百年史』、ひかりのくに、p50
- 6) 橋川喜美代(2006)アメリカ進歩主義幼稚園の改革運動と(砂場)ー砂場と大型積み木開発からの示唆を中心の一鳴門門教育大学研究紀要、p21
- 7) 倉橋惣三(1966)「フレーベル」『倉橋惣三選集』、フレーベル館、p379
- 8) 倉橋惣三(1966)「フレーベル」『倉橋惣三選集』、フレーベル館、p391
- 9) 堀七蔵(1928)私の視たる米国の幼稚園教育(四)、幼児の教育、p15
- 10) 記者(1909)玩具研究部賛助員への配布玩具説明、婦人と子ども、pp29
- 11) 同上

- 12) 前掲書11), p30
- 13) 榎原キク (1932) 川の組 (五月の一週間:東京女子高等師範學校附属幼稚園に於ける保育の実際), 幼児の教育, p29
- 14) 朝原梅一 (1933) 勤労家庭の幼児の保育, 幼児の教育, p3
- 15) ヘフアーナン, ヘレン (1947) 現代幼稚園教育の発達, 幼児の教育, p6
- 16) 同上
- 17) 前掲書15), p8
- 18) 文部省 (1979) 幼稚園教育百年史, ひかりのくに, p359
- 19) 前掲書, p360
- 20) 前掲書, p361
- 21) 清水エミ子 (1959) 積み木遊びにおける幼児集団の研究から, 幼児の教育, (58) 10, p29
- 22) 清水エミ子 (1959) 積み木遊びにおける幼児集団の研究から, 幼児の教育, (58) 10, p29
- 23) 鎌野智里 (1998) 保育遊具としての積み木の教育的意義, 美術教育 日本美術教育学会277, p73
- 24) 岩田純一 (2004) 子どもと出会う (7): 子どもの積木, 幼児の教育, p25
- 25) 牛山聡子・清水知子・高橋道子 (1974) 教育心理学研究22, (3), p44
- 26) 増田公男・中尾忍 (1986) 大型積木遊び事態に於ける幼児の社会的相互作用行動の分析 I, 金城学院大学論集人間科学編11, p91
- 27) 第5次幼児教育問題調査委員会 (1977) 東京都における幼児教育の在り方について (第5次報告) - 幼稚園・保育所における望ましい施設, 設備, 園具及び教材・教具の在り方-, p4

(指導教員 秋田喜代美教授)